82）との関係である。もし前記の時代（664～734）に天台疏が成立していたならば、荆渓は主著たる玄義釈籤、文句記、輔行伝弘決の中で、仁王経について、それぞれ八回、五回、十回と説き及んでおり、その中で仁王経と法華経との関係、或は菩薩の行位という重要問題に触れているのである。もし本疏がすでに成立していたならば、天台宗に関する資料を広く蒐収したと思われる荆渓が本疏を引用しない筈はないと考えられる。（この点については又別な機会に詳細を発表したい）しかし前述した釈籤、記、弘決或は止観義例や止観大意等に本疏の名前は無論、本疏の一節さえも見あたらないのである。即ち博学なる荆渓すら本疏を知らなかったようである。これによってみるに、果して本疏は荆渓当時存在していたのであろうか。深く疑問視せざるを得ないことを記して結びとする。

六老日向上人の出自について

佐久間珖甫

六老僧日向上人の出自については確かな所伝がなく、今日みられるものはいづれも江戸期に成ったもので、向師入寂後四百六十年を経た享保十五年編述という六牙院日潮の『本化別頭仏祖統紀』①を初見とするようである。同書に「啻記口碑為二世家一」とみえ、このころ既に古文献はなく口碑をたずねられて編述されたことがわかる。同書によると「父姓者藤原氏者小林名者民部実信為二正治帝衛兵曹一高曾皆衣冠也。高祖之父貫名氏重忠有二通家好一、元久元年甲子実信与二平伊勢平氏一而叛遂放二総之上州埴生郡藻原郷一」とあり、貫名重忠と通家の好があり、元久元年伊勢平氏の反乱に加り、上総藻原に流謫されたとしている。しかし年代的に不相応であり、実信の流謫説にはいささか疑問がある。その後三十年あまりを経て編述された玉沢の境持院日

通は『祖書証義論』②に向師の父を貫名仲四郎に作り「房州男金ニ住スル故ニ男金藤四郎ト名ヅク、光日尼ノ夫ニシテ向師ノ父ナリ」とある。これは恐らく通師の独断であろう、光日房を向師の母としている。この説は宗祖と血縁に結びつけようとする附会説であろう。そして「向師ノ猶父ハ小林治部小輔藤原ノ為遠ト云人也」とし父は男金の人であるが、向師は小林氏の猶子となったとし、曖昧な猶父名を作りながら小林の俗姓を認めている。その後水戸学林の建立、玄得両師は『本化高祖年譜改異』③に向師を「房州男金之人」とし、父「実信姓男金氏、出自藤原氏、称藤三郎、永仁丙申九月三日死、法号妙信、妻佐久間氏正安辛丑四月十一日死、法号妙向」とあり流石に附会説をとらず男金の碑銘を録し、なお統紀の藻原説を註記している。日通にはじまるこの男金説はその後多くの向師伝にもちいられているのである。

私はここで、向師の出自について考察してみようとおもう。

向師の俗姓小林氏について考えられることは、現在茂原市に属しているが、藻原寺の北方約二粁あまりのところ小林区がある。この小林は古くは小林郷の地で、文和、貞治の古文書に「上総国二宮庄小林郷」とみえる。④また元暦元年九月備前国藤戸の戦に佐々木三郎盛綱に属し武功のあった小林三郎重隆のことが『源平盛衰記』にみえるが、この小林三郎重隆はこの小林郷の人であったといわれる。⑤

向師の父を藤三郎といわれるが、その輩行名から推してその関係が思考される。もしこのことを事実とすれば小林民部実信が伊勢平氏の反乱に加わりはじめてこの地に流謫されたとする統紀の説にはなお考究の余地があろうと思われるのである。

向師が晩年身延より隠棲された上総坂本の法華谷には、当時身延より向師に随従した武士の子孫と伝える家がある。祖先は近江より移るというが、それはともかくこの家の家紋が佐々木氏の家紋とする「四ツ目菱」である。家紋は比較的定着不変性をもち、文字にみられない史料ともいえる。私は源平盛衰記にみる、小林、佐々木の関係を想起し、小林を俗姓とする向師と何らかの関係を推考して興味

深いものがある。

また向師ははじめ叡山の高乗院某のもとに出家したという。一説に高乗院某は上総に居ったといわれる。当時の上総地方は天台が盛大をきわめ、藻原の近く八幡原には「大御堂」と称する寺院のあったことが伝えられている。そしてこれらの寺院に修業した秀才は叡山に遊学したようである。向師とは同年輩といわれる川越喜多院の中興という尊海もこの藻原の近く二宮庄、高師の生れであった。⑥それらのことを考察するとき、幼少であった向師は恐らく叡山に登って出家したのではなくこのあたりに名声のあった高乗院の許に入門されたのではあるまいか。聖人の門に入った向師がやがて斉藤兼綱の請により藻原妙光寺を董じ、墨田、高橋氏等の権力者を後盾として、藻原を本拠に布教伝道に終始された事実は、それらの人々と父祖以来の特別な知遇関係にもとづくものであって、向師の父祖発祥の地をこの小林郷に求めることは、さほど無理ではないと考えるのである。

つぎに男金説について考察を述べてみよう。男金は安房国長狭郡男金で、現在は鴨川町和泉区に属す。小松原鏡忍寺の北方約二粁ほどのところ、男金山、女金山という二つの孤立した山があり、その附近に開けた豊沃な耕地を備えている。この地には佐久間氏を称する旧家があり、古来日向上人の母方の実家の子孫と伝えている。この家の近くに「日向聖人誕生地」とある碑があり、そこに向師の両親と向師の墓とする二基の古碑がある。向師の墓は上総坂本の法華谷にあるが、向師の両親の墓は茂原にも小林にも坂本にもなく、その伝えすらないのである。碑の側面に「佐久間氏」とのみあって建立の年代をあきらかにしない。しかしその形式からみても、江戸初期を遡るものとはおもえない。しかも向師の寂年号が誤刻されていることから推して本墓ではなく、佐久間氏の発願によって建立された供養塔であることが想像できる。

年譜攻異に「子孫至レ今栄茂、安永癸巳秋、建遊二歴其地一、問二其孫某一、某曰、寛永中予先、右京者以二男金(今称和泉)地名一自謙改二佐久間一。」とある。地名である男金姓を嫌って元来の佐久間に改めたという。このころ男金藤三郎説が

盛にいわれたのであろう。堀江顕斉もその著『蓮祖旧跡志』⑦に「向師ヲ上総国藻原人トスルハ他方ノ説伝聞ノ誤リナルヲ知ルベシ」と男金説を主張している。これらの説は宗祖と血縁に結びつけようとする故意が考えられる。恐らくそのころであろう男金佐久間氏の家紋は「藤ノ紋」にかえられたのではあるまいか。

そこで向師の母の出と伝える佐久間氏について考えてみよう。佐久間氏は桓武平氏である。従来宗門の伝える「統紀」「祖書証義論」「年譜攻異」「当家諸門流継図」等はいづれも藤原氏に作っているが、これは誤謬である。それは興津佐久間氏の法華堂であった妙覚寺の寺紋が無言のままに語っているのである。

佐久間氏は三浦義明の子多々羅義春、その子家村が安房国平群郡佐久間庄を領し佐久間を称したのに始まる。この家村に実子なく和田義盛の嫡孫朝盛が猶子となりそれを継いだ。この朝盛は文武両道にすぐれ、ことに将軍実朝の信任を得ていた。⑧祖父義盛は頼朝の挙兵をたすけて、やがて侍所別当という幕府の枢機にあったが、同じく幕府内に勢力をもった北条義時とは並立をゆるさず、たまたま義盛は上総国司を望んだがゆるされず、義盛は義時の独裁専制に憤激しつつあった。折柄建暦三年五月遂に和田一門の蜂起となり義時打討の乱となった。このとき朝盛は進退両難にせまられ、遂に僧形に身を託して、ひそかに上洛すべく出奔した。しかるに途中叔父の義直に連れ帰えされ合戦に参加した。この乱は鎌倉時代最大といわれる大乱であったが遂に和田方の敗北に終り一門は滅亡したのである。義盛は上総の伊北庄に本拠をもち一門は多く安房、上総の所領に繁栄したが、滅亡とともに一族の領地は没収されたのである。⑨しかるに朝盛は実朝の信任の関係によるものであろうその所領は安堵された。そしてやがて承久の乱には一族三浦胤義の軍に参加し、嫡子太郎家盛は父朝盛と反対の北条泰時の軍に従い、子重吉、孫重貞、勝正を率いて宇治川に戦功あり、功によって新領を加え、数ケ所の地頭職として一門は繁栄した。⑩この男金佐久間氏についてその事跡を明確にすべき資料はみあたらない。しかし興津佐久間重吉は前記のごとく朝盛の孫、家盛の子として系譜にもみえる。⑪

一説によると向師の母は重吉の子、重貞の妹という。すると寂日房日家とは姉弟の関係となるが、これは疑わしい。私はむしろ興津佐久間と男金佐久間はその一門とみるを妥当とする。日通は向師の母を光日房としているが、光日房は男金の近く天津あたりに住んだその一族ではなかったかと考えるのである。

ここで一考をわずらわしたいことは、波木井公との関係である。『清和源氏系図』によると実長の祖父加々美遠光の妻室は和田義盛の女であったとみえる。もし波木井公がその血統につながるものとすれば、義盛の家系とおもわれる向師の母とは、遠くない縁故関係が成立する。波木井公が特に向師に対し敬愛を以て接しられていた事実は、向師の天性とする人格的至徳のいたすところとはいえ、かかる関係もその一因とみることができるのではないであろうか。

以上私は日向上人の出自について考察したのである。上総に生れ、上総に生長した私は永々日向上人を門祖とする檀家として法華信仰をつゞけた父祖より聞かされた説話に対しその疑問の解明を与えたのがこれである。勿論確証とする資料を見ない私の推考はもとより不充分であることはいなめない。しかし曖昧模糊とする向師の出自に少しでも真に近づけようとつとめたつもりである。もし私のこの推考がいささかなりとも許されるとすれば私の光栄はこれにすぎないのである。

房総史談会、日本歴史考古学会会員、（南総郷土史研究）

（註）

① 「日蓮宗全書」史伝部同書上巻二一八頁

② 「日蓮宗宗学全書」旧記部(一)「祖書証義論」の和訳「御書略註」によった。

③ 「日蓮宗全書」伝記集

④ 「千葉県史料」中世編県外文書二〇六頁「極楽寺文書」

⑤ 「源平盛衰記」巻四十一。「稿本千葉県史」下巻六〇二頁。「寛政重修家譜」六輯三三三頁、小林区正林寺寺鐘（戦争供出）を手拓した篠崎四郎氏は銘文中（戦災焼失）「小林民部」云々のあったことを示教された

⑥ 「千葉県史料」前記書二七〇頁茨城「逢善寺文書」（康暦二年）

⑦ 「蓮祖旧跡志」安政三年刊「安房先賢遺著全集」五八四頁

⑧ 「佐久間系図」国会図書館蔵古写本

⑨ 「吾妻鏡」

⑩ 「吾妻鏡」承久三年六月十四日条。「承久記」岩間尹著「実録三浦党」一二〇頁

⑪ 岩間尹著　前記書